カザフスタン留学体験記

@梅野亮太（経済学部06年卒）

留学先 カザフスタン、カザフ民族大学（アルマトゥ市）

期間 2004年9月～12月

留学の種類 私費留学

留学の動機 シルクロードに興味があったことと、ロシア語を学びたかったから

（写真中央が梅野さん）

お金 ¥¥¥ **費用** >> 授業料10万円、寮費4千円、生活費15万円、航空券20万円、旅行費15万円（お土産代込み）

ある１週間のできごと

	月	火	水	木	金	土	日
午前	授業					カザフ語の授業	休養
午後	宿題・予習					宿題・予習	買い物
放課後	食事・留学生と交流						

1 なぜカザフスタンを選んだか

「どうしてカザフスタンなんかに行くの？」、と留学前によく訊ねられた。帰ってきた今でも「何しに行ってきたの？」と訊かれる。たしかに普通に留学を考えたときにカザフスタンという選択肢は出てこないだろう。

ではなぜカザフスタンを選んだのかというと、結構複雑な話になる。もともと僕は中央アジアに興味があった。高校時代からシルクロードのオアシス都市サマルカンドに行くことを夢見ていた。でもサマルカンドはウズベキスタンにある。中央アジアに留学しようと考えたとき、僕はウズベキスタンに行きたいと思ったが、仲介の業者がウズベキスタンを薦めなかった。理由は「排外主義が強まっている」とのことだった。僕は信じなかったが、業者がカザフスタンの大学の資料しか送ってくれなかったし、時間もなかったので、おすすめのカザフスタンで妥協することにした。

これは実際に行ってから知ったことだが、カザフスタンは中央アジアのほかの国よりもロシア人の割合が多く、ロシア語が通じやすい環境だった。僕は留学の目的のひとつにロシア語を勉強することがあったので、この点はとてもよかったと思う。

またカザフスタンは中国とロシアという経済発展が続くであろう大国と国境を接していて、さらにカザフスタン自体も天然資源が豊富で、今後の世界経済を考える上でも非常に面白い地域である。そんなこともあってかゼミの先生も僕のカザフスタン留学を、「画期的ですね。」と少々興奮気味であった。

2 どんな大学で学んだのか

僕は２００４年９月７日夜にカザフスタンに到着した。留学先の大学名も「カザフ民族大学」という日本語の名前しか知らなかった。空港には僕の名前が書かれた紙を持っている大学の職員がいて、寮まで案内してもらうことになっていた。実際、何の問題もなく寮に到着し、僕のカザフスタン生活がスタートした。

次の日から学校が始まることはなかった。それはなぜかというと、ナザルバエフ大統領が大学を訪れることになっていたからだ。チェコの大統領も来ていたらしい。あとで聞いた話だが、ナザルバエフ大統領は大学を紹介する際に「ここがカザフのハーバードです。」と説明したという。

ではカザフのハーバードはどんな大学だったのだろうか。カザフのハーバードは北大のように広いキャンパスにたくさんの木があり、スポーツ施設、食堂、郵便局、商店などもあり非常に便利な大学だ。寮もキャンパス内にある。それも一つや二つではない。少なくても１０はあったと思う。

寮がたくさんあれば人も多く住んでいる。当然ごみも多い。キャンパス内にはいくつかのゴミ捨て場がある。分別はしない。定期的に処理はされているようだが、いつも不快なにおいが漂う。朝は犬がごみをあさり、昼には人がごみをあさる。どうやらタバコがほしいようだ。

ごみがあるのはゴミ捨て場だけではない。キャンパス内のいたるところにごみは落ちている。一番多いのはビール瓶の破片だ。学生たちはキャンパス内でビールを飲んで、そのへんに空き瓶を捨ててしまうのだ。ただ捨てるならまだいいが、割ってしまうからたちが悪い。転んだら危ないな、といつも考えていた。

またキャンパス内には子供がかなり住んでいる。子供たちはサッカーをしたり、夜に爆竹で遊

『カザフスタン留学体験記』　梅野 亮太

んだりしながら暮らしている。彼らを見ていると大学にいるという感じがしなかった。

夜のキャンパスは寮の前やメインストリート以外は真っ暗になる。でも結構たくさんの人が出歩いていて、みんな酒を飲んだり、友達同士で話をしたりしていた。人気のないところに行くと、かなり高い確率でカップルが無言で抱き合っていたり、踊っていたりしている場面に遭遇する。僕は何度もそんなカップルのすぐ横を通ったので、慣れてしまったが、最初はちょっと申し訳ないような気がした。

3 悪夢の健康診断

カザフスタンについてから最初の授業を受けるまでに２週間くらいかかった。これは留学期間が３ヶ月の僕としては大問題であった。なぜそんなことが起こったのだろう。

まず仲介の業者がまずかった。彼らはHIV検査や健康診断書などをロシア語に翻訳して、大学に提出すればいいと考えていたようだが、そんなものは受け取ってもらえなかった。結局病院で健康診断を受けることになったが、これは想像を絶するものだった。結果から言うと４日かかった。まず健康診断は学生病院で診察を受ける。眼科、神経科、内科など専門ごとに医者が別の部屋にいて、それぞれの診療を受けるには１時間から２時間待たなければならない。しかも昼休みもある。神経科では２時間待った挙句、「頭が痛いか」と訊かれ、僕が「痛くない」と答えるとはんこを押して終わった。こんなことのために２時間も待ったのかと思うとばかばかしくなってくる。もっと効率の良いやり方はあるに違いないが、この効率の悪さは旧ソ連の負の遺産なんだろうなとも思った。ちなみに病院に千円くらい払えば、全部受診したことにしてもらえ、必要なはんこも押してもらえるらしい。買収である。

病院で驚いたことはまだある。血液検査は原始的だった。注射器を使うのかと思ったが、それはHIV検査のときだけで、そのほかのときは小さなかみそりみたいな刃物（もちろん新品）で薬指のあたりを切られる。そしてポンプで吸い上げられるのだ。効率の悪さはここでも見られる。なんと切られるのは１回ではない。全部で２回切られた。おそらく違う検査なのだろうが、血液を２回も採るなら、１回でたくさん採ってもらいたいものである。

病院は非常に疲れる場所だ。現地の人たちもあまり行きたくないと思っているようだ。医者も信頼されていない。医者よりも英語を教えたほうが金になるという話も聞いた。街には医療グッズがたくさん売っている。一般人もあたりまえのように注射を打てるそうだ。

4 授業とクラスメイトたち

僕は国際関係学部の外国人向けロシア語コースで勉強することになっていた。しかし、ここの職員はロシア語とカザフ語しか話せない。僕は以前、第二外国語でロシア語を勉強したがあまり身につかなかったし、ほとんど忘れてしまったため、コミュニケーションがとれなかった。そこで職員が日本人の留学生を連れてきて、通訳をしてもらった。でもこの日本人も常にいるわけではないので、一人で苦労して話をする場面が何度もあった。当然いくらかはロシア語を覚えていった。

病院の診察も終えて、授業も受けたかったので、どのグループに入ればいいか訊きに行き、次の週から授業が始まると伝えられた。しかしそのグループは愉快な５人の中国人と寡黙な一人の

韓国人がいるグループで、みんなロシア語はまったく知らなかった。明らかに自分にレベルのあったグループではないと考えていた。どうしてこんなグループにいなくてはならないのだろうと思っていた授業開始３日目、僕はあからさまに退屈そうな表情で授業を受けていると、先生が「お前がもし違うグループに行きたいのであれば、私のもうひとつのグループに来なさい。」というので、グループを変えることにした。これからも大変そうだな、と思った。

グループが変わり、多少レベルが上がった。グループのメンバーは韓国人女性３人と中国人４人だ。韓国人は陽気な３２歳のスヨンという人と、おせっかいなヨンミと、会社から派遣されているというミジョンという顔ぶれだった。スヨンはカザフスタンでビジネスをやるためにロシア語をやっているそうだ。牛肉が安いから「吉野家」をカザフでやりたいといっていたが、カザフの人にしてみればそれほど安くないだろうし、牛肉もおいしくないからやめろと忠告した。ちなみにこの会話は英語で行われた。中国人のほうは女性が一人と、あまり勉強をしない３人の男たちだった。結局３人のうちの２人は授業を頻繁にサボり、授業の進行を妨げるので先生の怒りを買い、ほかのグループに移った。彼らは１ヶ月以上ロシア語をやっているのにアルファベットすら満足に読めなかったから当然かもしれない。

しかしこのグループでまじめに勉強をしているのはヨンミだけであった。ほかの人たちは授業中先生にあてられても答えられず、そこでおせっかいなヨンミが答えを言ったり、韓国語で解説したりしていた。このとき先生は頬杖をついたまま黙っている。さらに僕がこのグループに入る前からグループに所属していたという５０歳くらいの韓国人女性が１ヶ月の帰国から戻ってきたのだが、授業についていくのが大変で、ヨンミが授業中に解説するので、ますます授業中の韓国語の比率が増し、嫌気がさしたのでほかのグループに移りたいと先生に伝えた。

最後にたどり着いたグループは、いろいろな国の出身者がいた。中国、韓国のほかにトルコ、ノルウェー、アフガニスタンといった具合である。中国出身の人は３人いたが、そのうち２人は漢民族ではなくカザフ族だ。一人はカザフスタンの国籍を取得したいとも言っていた。このグループの先生は授業に熱心で、授業中の中国語や韓国語もほとんどなかった。生徒も休み時間にロシア語で話し合うなど非常にまじめな人ばかりで、語学の勉強にはとてもいい環境だった。

またこのグループはとても仲がよく、何度かパーティーも行われた。その中でもアフガン人のクラスメイトのシャフザダが企画したパーティーは印象的だった。このパーティーはシャフザダのご主人がレストランにクラス全員を招待してくれたもので、みんな夜遅くまで料理を食べたり、ウオッカを飲んだり、踊ったりした。ご主人は十数年前からカザフスタンに住んでいて、大学を出てから働いているという。このパーティーには運転手つきの車で登場した。食事代もすべて彼が出してくれた。僕はアフガン人に食事をご馳走になるなんて夢にも思っていなかった。ちなみにご主人はアフガニスタンに住む両親には酒を飲んでいることは秘密にしているという。

５ 寮生活（韓国人や中国人、ルームメイトなどについて）

僕が住んでいた寮は大学の外国人寮だった。この寮にはカザフスタン国籍の人は原則的に住めないことになっている。しかし、カザフ人はたくさん住んでいる。なぜかというと彼らはカザフスタンではなく、隣のキルギス、ウズベキスタン、トルクメニスタン、中国出身のカザフ人だからだ。当然カザフスタンの国籍は持っていない。

最初に知り合った人もキルギス出身のカザフ人だった。この人は日本語学科に所属するジュルドゥズという名の学生で、僕がロシア語とカザフ語しか通じない寮の管理人との話がうまくいかなかったときに、必ず管理人に呼び出されていた。もう一人日本語学科に所属するチョルポンという学生がいて、こちらのほうが日本語が上手だったが、通訳として呼び出されることはなかった。カザフスタンに着いたばかりのころは、この二人の影響もあり、キルギス出身の人と話す機会が

多かった。

僕がいたころ、寮では中国人が急増していた。中国人は寮の廊下にバナナの皮やタバコの吸殻を平気で捨てたり、夜中に大音量で音楽を聴いたり、サッカーをしたりするので、管理人に怒られたり、キルギス人に嫌われたりしていた。僕ははじめのクラスで一人の中国人と仲良くなり、何度か彼の部屋にも行ってみた。彼は３人部屋で暮らしていて、部屋には３台のパソコンと、松たか子と浜崎あゆみのポスターがあった。彼のルームメイトもあたたかく僕を迎えてくれて、一昔前の日本のドラマやアニメ、日本のアイドル歌手のビデオクリップを見せてくれた。彼らは日本の若者文化に通じていることがよくわかった。留学直前の日本のメディアでは、サッカーのアジアカップで日本相手に猛烈なブーイングをする中国人の映像ばかり流れていたが、実際に中国人と接してみて、そういったことは中国人のほんの一面に過ぎないのだと感じた。

カザフスタンに留学している間、もっとも仲良くしていたのが韓国人たちだった。はじめの一ヶ月ではあまり知り合いもいなかったが、大学に行事であった遠足で多くの韓国人と知り合い、それからは毎日のように韓国人と話をするようになった。韓国人の部屋を訪れることも多くなった。

韓国人も日本の文化に興味を持っている人が多いように感じた。年上のお兄様たちとは酒を飲みつつ日本のアニメを鑑賞し、同い年の女の子たちとは「冷静と情熱のあいだ」を鑑賞した。どちらも彼らがDVDを持っていて、字幕は韓国語だった。「冷静と情熱のあいだ」を一緒に観たのは、韓国の外国語大学から交換留学で来ていた３人の女の子と、ウズベキスタン出身の二人の朝鮮人だった。朝鮮人がなぜウズベキスタンにいるのか不思議に思う人も多いだろう。この人たちはソ連時代スターリンによって、極東地域から強制移住させられた朝鮮人の子孫なのだ。カザフスタンにも朝鮮系の住民は多く、バザールにはキムチも売っている。そういうこともあり、韓国企業も中央アジアに積極的に進出していて、留学生も非常に多い。寮には２０人くらいの韓国人が住んでいた。アパートを借りている人も多かった。韓国人はとても親切で、ほかの国の人と比べて日本人とは価値観も似ているので話しやすかった。

寮生活は楽しいことばかりではなかった。寮生活最大の苦難は管理人とルームメイトであった。ルームメイトはヌルランというトルクメニスタン出身のカザフ人で、寮内ではいい人だということになっていた。しかし、彼は僕のものを勝手に使ったり、掃除をしなかったりするので、時が経つにつれだんだん腹が立ってきた。極めつけは共同で買ったものを仕事場に持って行ったままにしたり、共同の食事代として僕が払ったお金を着服したりしていたのだ。頭にきたので彼の友人のトルクメン人に相談し、問題を解決してもらった。しかし、お互い気まずい雰囲気になったので、僕はこのことを寮の管理人に相談して部屋を替えてもらうことにした。

管理人は「来週まで待て」というので待っていたが、その間にヌルランはほかの寮に移っていった。彼は最後まで謝らなかった。そして部屋に管理人が現れこういった。「お前は部屋を変える必要はない。ここに一人で暮らせ。ヌルランはもういない。」僕も納得し、一人暮らしを満喫しようとしていた。しかし、三日も経たないうちに新しいルームメイトがやってきた。彼はトゥラトというエミネムに憧れるキルギス出身のカザフ人で、地元では歌手活動を行っているクールな男だった。彼は幸い善人で、トラブルもなく楽しく共同生活ができたが、管理人の嘘には本当に腹が立った。

管理人とヌルランのほかにも困った人物が一人いた。キルギス出身のケンシュリクという男だ。彼は国会議員の息子で、最初にあったときは親切にしてくれたが、次第にいろいろなことを命令するようになった。「本を貸せ」、だとか「トイレを洗え」、など威圧的な態度が目立つようになり、

『カザフスタン留学体験記』　梅野 亮太

僕も腹が立ったので言い返したら、彼は意外にも弱気になり、それ以降は僕に命令することもなくなった。僕が留学を終えて帰るときも、父親のポスターをプレゼントしてくれた。彼との関わり合いを通して、意思表示の大切さを学ぶことができたと思う。

６カザフの日本語学生

カザフ民族大学には日本語学科が存在する。寮に住んでいる日本語学生に誘われて、一度だけ学科を見に行くことにした。日本語学科では二人の日本人教師が働いていた。そのうちの一人は僕と出身地が同じで、話もはずみ、授業に参加することになった。

参加したのは５年生の授業で、みんな日本語はかなり上手だった。ディスカッションのテーマは「仕事」で、日本の企業について話し合っていた。僕みたいな若い学生はカザフスタンにほとんどいないためか、学生たちは日本についていろいろな質問を投げかけてきた。あまりうまくは答えられなかったが、同じ世代の若者の考え方などがよくわかり、なかなかいい経験になった。

一度、日本語学科の学生がどんな勉強をしているのかたずねてみたところ、日本の作家の本をロシア語で読んだり、日本のテレビドラマを見たりするのだという。カザフスタンで日本の作家は森鴎外、安部公房、村上春樹、村上龍などが有名らしい。僕も自分の授業で先生に「安部公房は日本を代表する作家です。もちろん読んだことはありますよね。」といわれたことがある。僕は読んだことがなくて困ったが、それ以上に困惑したのは「安部公房」の発音が「コバ・アベ」で、何を言っているのかわからなかったことだ。

７街の様子

アルマトイの建物は旧ソ連時代に立てられたと思われる古い建物が現在も多数を占めている。レストランや商店は建物の一階だけを利用したものが多い。

本屋はいくつかあるが、売っている本の種類はそれほど多くない。雑誌などは本屋にない場合がほとんどだ。旧ソ連時代、本はモスクワで作られていたので、その名残もあり、カザフスタンではそれほど多くの本が出版されていないようだ。現在もロシアで出版された本が多く占める。本屋には何度も行ったが、ほしくなるような本がほとんどなかった。英語で書かれた本は、ほかの本に比べて信じられないくらい高いので、これは外国人から金を巻き上げようとしているのだな、と感じた。

音楽はロシアのポップスが人気だ。レコード屋に行けば洋楽、ロシアの音楽、カザフスタンの音楽の CD やカセットテープがたくさん並んでいる。値段も日本に比べれば格段に安い。ビートルズの CD はだいたい５００円くらいで買える。

レコード屋には映画の DVD やビデオ VCD なども売られている。映画はカザフの娯楽のひとつで、日本の映画も上映されることがある。だが、上映される日本映画のほとんどはホラー映画だ。クラスメイトのカザフ人がホラー好きで、いつも日本のホラー映画の話をしてきたのだが、ホラー映画はほとんど観ない僕にとっては「着信アリ」がいくら日本映画だからといって、そんなことを話題にされては困るのだ。

アルマトイの街にはカジノが多い。夜になるとネオンでいっそう目立つ。街中いたるところにあるので、はじめはとても驚いた。旧ソ連の国なので、統制は厳しいと思っていたのだが、３ヶ月滞在して感じたのはこの国がとても自由な国であるということだ。民族差別もほとんどなく、ゲイバーもあるし、警官が勤務中にトランプをやるなんて日常茶飯事だ。それどころか外国人に賄賂をねだるのも自由、大学の単位を買収するのも自由、選挙のときの票の操作も自由である。とにかく良くも悪くも自由なのだ。

カザフの人たちはどこで買い物をするのだろうか。それはバザールである。バザールは簡単に言うと市場である。カザフのバザールでは食料、電化製品、雑誌、新聞、雑貨、台所用品、スポ

一ツ用品、衣服など何でも売っている。アルマトイで一番大きなバザールは「バラホルカ」とよばれる街の郊外にある超巨大バザールである。ここは巨大すぎて一日では到底回れない。「ここにないものはない」といわれるほどとにかく大きい。中国人の姿も多く、「中国貿易交城」という中国製品の売り場まである。

バラホルカは日曜日には大混雑する。バラホルカ行きのバスは東京の満員電車さながらの混み具合だ。ここはカザフスタンで最も活気のある場所なのかもしれない。街中にはデパートやショッピングモールがあるがバラホルカに比べ、売っている物の値段が２倍くらい高く、裕福な人たちしか買い物をしない。バラホルカは間違いなくアルマトイで一番面白い場所だろう。もしカザフスタンに行ってみたいという奇特な人がいれば、僕はバラホルカに行くことをおすすめする。

アルマトイには地下鉄がない。鉄道も長距離移動の手段であり、駅は街外れにある。市内交通の主役はバスと、路面電車、そしてトロリーバスである。トロリーバスはバスの天井から伸びたポールで、電線からの電気を使って動く乗り物である。旧ソ連のほとんどの国で残っているようだが、スピードが遅かったり、ポールが外れて立ち往生したりと、トラブルの多い乗り物である。一回２０円くらいで乗れるので、よく利用した。バスも３０円くらいしかかからない。ほかにもマルシュルート・タクシーというものもある。これは決まったコースを走る乗り合いタクシーである。だいたいがバス停に止まるので、バスとあまり変わらないような気がするが、混んでいるときは天井が低いため中腰にならざるを得ないので体力的にはきつい。アルマトイは以上の乗り物の路線をすべて覚えれば、自由自在に移動ができるのだ。

8 留学で得たもの

一人暮らしをしたことがなかった僕にとって、海外で３ヶ月暮らした今回の留学は非常に刺激的だった。カザフスタン留学は前例が少ないので苦労することも多かったが、それ以上に楽しいことがたくさんあった。

楽しいだけではなく、今までよりも成長できたと感じることも多い。日本にいるときに比べ、自分で判断しなくてはいけない機会が増えた。これはとてもいい経験だった。自分で決めたことが失敗だったとしても、その反省を次に生かすことができればいいのだと考えるようになり、以前よりも前向きになれたと思う。

僕は語学や現地の文化の知識よりも、自分を成長させることにこそ留学の意味があるのではないかと思っている。

■□■留学アンケート■□■

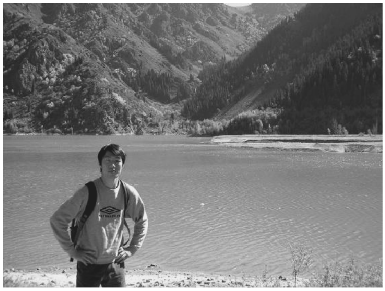
①その国に持って行って良かったものは何ですか？
ロシア語の辞書。これがないとどうにもなりません。
②その国に持って行かなくて後悔したものは何ですか？
韓国語の文法書。寮では韓国人の友人が多かった。
③服装はどうしてましたか？現地で服を買いましたか？
日本から持って行ったものがほとんどでしたが、トルコ製、イラン製の服も購入しました。
④インターネット、音楽、書籍、テレビなど情報環境はどうでしたか？
インターネットは日本センターで１時間１００円もかからない程度でできました。接続状況も良かったです。
⑤留学生の国籍構成はどうなっていましたか？
寮では中国人が１００人以上、韓国人２０人前後、キルギス人２０人前後、その他トルコ人、トルクメン人などがいました。

↓大学本部

↓トロリーバス

↓郊外へ遠足

↓郊外の湖



↓カザフスタンの街並み

『カザフスタン留学体験記』　梅野 亮太